



書評同人  
**五十嵐太郎**  
Taro Igarashi

**苅部直**  
Tadashi Karube

**小池昌代**  
Masayo Koike



明恵上人  
白洲正子  
講談社文芸文庫/1210円

## 小池昌代

詩人、作家

# 正しいスキーマが 言語の森を明るくする。

このごろ、個人的に和歌が面白い。現代口語の自由詩をもっぱら書いてきたので、定型・古語の和歌は遠いものだった。ところが今は夢中になっている。中世の和歌を読み続けるなかで、明恵というお坊様と再会した。実は明恵、確かに和歌も詠んだが、むしろ夢の記述で知られている。和歌というのは夢遊病者の歩行にも似ていて、極めて身体的であり、読む方も魂の動きのようなものには付き従

うことになる。無意識が三十一文字の型のなかにするすると流れ込んでいるのだ。歌人が和歌でやることを、明恵は夢の記述を通して実現したともいえる。白洲正子「明恵上人」、河合隼雄「明恵夢を生きる」は、過去に読みかけて中断していた。ふと手に取ると面白い。なにをいませら、明恵なのか。疫病禍にふるえる閉塞的な社会を、内省の力によって突破するヒントが彼の人の内にあるよう

な気がするからか。あるいは二〇一一年の東日本大震災のときからずっと続いていると感じる、死者とともに生きる時間が、これらの本を、改めて引き寄せたのだ。また、これは私事だが、親も死に、私自身、いよいよなものかと直接対峙すべきときが来たという、ある意味では解放された、ある意味では覚悟を決めなければならない年齢にさしかかったことも影響しているだろう。成熟の意

味を知りたいとも思った。白洲正子は前掲書のなかで、西行との比較において次のように書いている。「明恵は」たしかに優れた詩人であり、私達の胸を打つ作も少なくはないのに、それらは和歌として独立することなく、雲散霧消して、生活の中に吸収されて行く。……(略)……歌は消え、生活だけが鮮やかに浮んで来る。詩人ではあったが、歌人ではないと、いつてえはそれまでですが、そこに彼の真の姿があり、謎が含まれていると思っております。さらに明恵の夢について、「明恵の夢は夢ではない、覚めている時の生活の延長であり……(略)……夢と日常の生活が、不思議な形でまじり合い、絡み合っている」とも記している。

政権が樹立するという大きな社会変革が起った時代でもある。変わって現代、自然災害・疫病・自殺で人が死に、社会全体が地鳴りのような低い音をたて、内側から変わりつつある気配がある。中世と令和。時代の暗さにおいて、どこかしら似ていると私は思う。

明恵には壮絶なエピソードがいくつかあるが、十三歳のときには、身を捨てようと墓場へ行き、自分の身を天や狼に喰わせようと地面に横たわったらしい。その後、再び実行するも失敗、ついには夢を見、狼二匹に、自分の身を喰わせ、その苦痛たるや、大変なものだったが、我慢していると、すべて喰い尽くされてしまい、最後は、全身、汗をかいて目覚めたところ。十三歳で「ステニ老イタリ」と書いた、明恵の透明な「老成」と性衝動

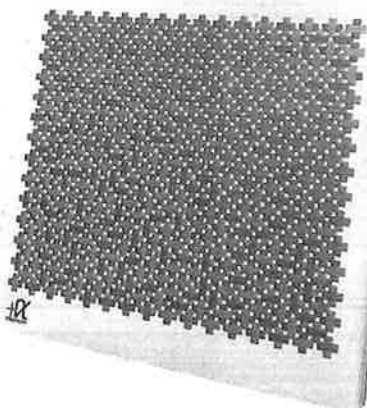
とをつきあわせ、河合隼雄はどきどきするような分析を行う。そのとき、私の心もまた、耕された感触を得るのである。新刊書では、今井むつみ「英語独習法」が面白い。対象物へ、いかにアプローチするかという方法において、英語も和歌も同じであるという気がする。言語学習のみならず、大人になってからの学びに大きな気づきをくれる本だ。英文を書かなければならないとき、翻訳アプリが一発で出してくれたものが、案外使えず、めっちゃくちゃな英文だったという経験はないだろうか。今は優れた翻訳人工知能が刻々、開発途中なのだろうが、結局はある一語が、他の英文のなかで、どのように使われているかを見ていかなければならない。それには英語という言語の全体の体系を知らなければなら

ないだろう。そう思って私は毎回、ボーズンとするのだ。本書はこの言語体系のことを、スキーマという概念で説明している。「一言でいえば、ある事柄についての枠組みとなる知識」しかもそれは、「それぞれの状況で瞬時に身体が反応するような、身体に埋め込まれた意味のシステムなのである」と。日本語を母国語として持つ者には、日本語の見えないスキーマがあり、英語の話者も同様である。日本語スキーマと英語スキーマの間には相当のずれがあり、思いこみが修正されないと、いや少なくともこのことを認識しない限り、いつまでたっても英語は習得できない。そのためステップを、本書は具体的に示唆してくれていて目が輝くが、なるほど簡単ではない。しかし苦しいばかりで

もない。言語の森へとわけ入っていく知的好奇心がわき、独習の背中をそっと押される。スキーマのずれは、古語と現代語との間にもあるのだ。私は今もなお、まるで外国語のように、古語ひとつから学びの途上にある。古語という言語体系の上には、大きく日本語という枠組み、さらには日本文化という枠組みがある。この本を読んで、言語表現のみならず、音楽演奏、あるいは絵画など、さまざまな国毎の表現の場面で、スキーマの存在に気づき考えることになった。ジャズセッションで楽器が言葉を喋っているように感じたことがあるが、言語体系のようなものを演奏が背負っているとするなら、音楽にもまた、スキーマという概念をあてはめることができるのではないかと。

## 明恵 夢を生きる

河合隼雄



## 明恵 夢を生きる

河合隼雄/講談社+a文庫/1034円

## 英語独習法

## 英語独習法

今井むつみ/岩波新書/968円